

論文

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと

東南アジアのムスリムの仲介者

— カイロの雑誌『ファトフ』を事例として —

山 口 元 樹

ーワード

東南アジア アラブ地域 定期刊行物

じめに

近代西洋において発展した科学技術の中でも、印刷は、気機関と並んで、一九世紀以降の世界的な規模でのコミュニケーションの深化を促進したものととして着目される（Green 2010; Gelvin and Green 2014）^[1]。イスラーム世界において特に注目すべきなのは、ムスリムの共通語であるアビア語を用い、その中心に位置するアラブ地域で発行さ

れた定期刊行物（新聞・雑誌）が、地域を超え幅広い読者を獲得したことである^[2]。本稿は、エジプトのカイロで発行された『ファトフ al-Fatḥ』（一九二六～一九四八）を取り上げ、アラブ地域の定期刊行物が東南アジアとの間に構築したネットワークについて検討していく。

東南アジアに流入したアラブ地域の定期刊行物としてこれまでの研究で取り上げられてきたのは、ほぼ『マナール al-Manār』（一八九八～一九四〇）に限られてきた。この

雑誌はイスラーム改革主義運動の著名な思想家、ラシード・リダー Muhammad Rashid Ridā (一八六五～一九三五) によってエジプトのカイロで発行され、「モロッコからジャワに至るまで」広範な地域で読者を得たことで知られる [Gibb 1953, p. 178]。従来の研究としてあげられるのは、まず、この雑誌に掲載された東南アジア関係の記事の概要を紹介したものである [Bluhm 1982; Abaza 1998]。³⁾ ブルハスディンは、それらの記事の中でも、東南アジアのムスリムの質問に応じてこの雑誌で発表されたファトワ (fatwa) に着目し、その質問者や質問内容を分析した [Burhanudin 2005]。⁴⁾ さらに、『マナール』は、東南アジアのイスラーム系定期刊行物の嚆矢であるシンガポールの『イマーム al-Imam』や西スマトラのパダンの『ムニール al-Munir』のモデルとなったと論じられる [Bluhm-Warr 1997; Azra 1999]。⁵⁾

だが、『マナール』以外にも、多くのアラブ地域の定期刊行物が東南アジアのムスリムの間で読まれていたことは見過ごされてきた。特にインドネシアのイスラーム研究では、近代におけるアラブ地域からの影響が、リダーと彼の師ムハンマド・アブドゥフ Muhammad ‘Abduh (一八四九～一九〇五) に漠然と結びつけられてきたと指摘されている [Laffan 2003, p. 9]。ラッファンは、近代においてアラ

ブ地域のムスリムが抱いていた東南アジア像の変遷を論じる中で、『ファトフ』など『マナール』以外のアラブ地域の定期刊行物も取り上げている [Laffan 2007]。しかし、この研究が依拠したライデン大学所蔵のオランダ人東洋学者スヌック・フルフローニェ G. Snouck Hurgronje の定期刊行物コレクションは、ラッファンが主張するような網羅的なものではない。

分析の対象が限られていては、アラブ地域の定期刊行物が東南アジアの間に構築したネットワークの実態について一般化した議論はできない。アラブ地域の定期刊行物が東南アジアに流入したことによって、両地域の間のコミュニケーションが緊密化したことは間違いないだろう。だが、アラブ地域の定期刊行物が構築したネットワークに参加し、両地域の間のコミュニケーションを実際に担っていたのは、東南アジアのムスリムの中でもどのような人々だったのであろうか。

以上に基つき、本稿は、東南アジアで広く読まれていたことが確認できる『ファトフ』について論じる。⁶⁾ 本稿が着目するのは、この雑誌における東南アジアのムスリムの執筆者や東南アジアの記事に関する情報源である。ここで東南アジアのムスリムという場合、アラブ地域からの移住者や東南アジア出身であるがアラブ地域に滞在している者・

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

移住した者も含むことにする。『ファトフ』を『マナール』と比較しながら検討することで、アラブ地域の定期刊行物が構築したネットワークにおいて、両地域の仲介者としての役割を果たした東南アジアのムスリムについて明らかにしたい。

一 アラブ地域の定期刊行物と東南アジア

『ファトフ』と東南アジアについて論じる前に、以下ではまず、アラブ地域の定期刊行物が東南アジアに流入していく過程について、『マナール』を中心に概観していく。ここでは特に、東南アジアのムスリムの中でどのような人々がそれらの定期刊行物に記事を執筆していたのかという点について検討したい。

アラブ地域の定期刊行物の流入の始まり

アラブ地域で定期刊行物が社会に普及するのは一九世紀後半のことである。それらの定期刊行物は、早くも一九世紀末には、東南アジアでも読まれるようになっていた。東南アジアのムスリムの中でアラブ地域の定期刊行物に最初に関心を示したのは、シンガポールやインドネシア（一九四二年まではオランダ領東インド）に住むアラブ人

であった。東南アジアに少数ながら居住するアラブ人の大部分は、ハドラミ（*Hadrami*）、すなわちアラビア半島南部にあるハドラマウト地方（現イエメン共和国）からの移住者とその子孫である。ハドラマウトから東南アジアへの移民の流れは、スエズ運河の開通後、一九世紀後半にインド洋の海上交通に蒸気船が導入されて以降、著しく増加した [Berg 1886, p. 105]。二〇世紀初頭には、シンガポールに約九〇〇人、インドネシアに約二万八〇〇〇人のアラブ人が居住していたと見積もられる [Ingrams 1936, p. 146; Volkstelling 1930, p. 48]。

一九世紀末にインドネシアのアラブ人コミュニティを調査したファン・デン・ベルフ L. W. C. van den Berg によれば、彼らは、海外（アラブ地域以外も含む）で発行された多数のアラビア語定期刊行物を購読していた。その主なものとして、イスタンブル発行の『ジャワイブ al-Jawā'ib』、バイルート発行の『サマラート・アル・フヌーン *Thamarāt al-Funūn*』、パリ発行の『ウルワ・ウスカー（固き絆）*al-Urwa al-Wuthqa*』など一〇誌／紙の名前があげられている。これらのうち、『ウルワ・ウスカー』は、アブドワフと彼の師ジャマルッディーン・アル・アフガーニー *Jamal al-Dīn al-Afghānī*（一八三八／三九―一八九七）によって編集・発行された。この雑誌は、欧米列強による

植民地支配下に置かれていた様々な地域のイスラーム運動やナショナリズム運動に多大な刺激を与えたことで知られる [Berg 1886, p. 174 note 1]。

東南アジアのアラブ系住民たちは、遅くとも一八九〇年代にはこれらの定期刊行物に寄稿を始めている [Latfan 2007, pp. 698-704]。最初期の寄稿者の一人は、サイフッディーン・アル＝ヤマニー Sayf al-Dīn al-Yamānī という人物である。これは、シンガポールに住んでいたムハンマド・ビン・アキール・ビン・ヤフヤー Muhammad bin 'Aqīl bin Yalyā (一八六三～一九三一) の筆名だと考えられている [Latfan 2007, p. 688]。ビン・アキールは、ハドラーミーの中でもアラウィー 'Alawī もしくはバーアラウィー Bā 'Alawī と呼ばれる預言者ムハンマドの子孫の一族である。アラウィーたちは、高貴な血統によって東南アジアの現地ムスリム社会において高い敬意を受け、伝統的な宗教勢力と強い結びつきを持っていた。その一方、彼らの中にはムスリム社会の改革の必要性を早くから認識する者も多く、定期刊行物の発行やイスラーム教育の近代化といったイスラーム改革主義運動で大きな役割を果たした。ビン・アキールは、前述のシンガポール発行のイスラーム系定期刊行物『イマーム』の発行に参加している [Azra 1999, p. 149]。

一八九六年、サイフッディーンは、カイロの日刊紙『ム

アイヤド al-Mu'ayyad』にインドネシアにおけるオランダの圧政を批判する論説を発表した。彼はその後、アチエ戦争などスマトラの状況やアチエとオスマン帝国の歴史的な関係、インドネシアのムスリム全般に関する論説を『ムアイヤド』に送っている [Latfan 2007, pp. 698-699]。同紙には、インドネシアのバタヴィアに住むアラウィーの有力者、アリー・ビン・アフマド・ビン・シハープ 'Alī bin Ahmad bin Shihāb (一八六五／六六～一九四五) もしばしば投稿した。『ムアイヤド』は、イギリス占領下エジプトにおける有力なナショナリスト系定期刊行物であり、アリー・ユースフ 'Alī Yūsuf (一八六三～一九一三) によって一八八九年に創刊された。東南アジアのアラブ系住民がしばしば寄稿していたことから、この新聞がイスラーム世界における国際紙としての側面も持っていたことがうかがえる。

『マナール』と東南アジア

『マナール』には、この雑誌が創刊された一八九八年に東南アジアのムスリムによるものと考えられる最初の記事が掲載されている^①。その記事では、「ジャワのムスリムたち」がオスマン帝国の国籍の取得を望んでいるがオランダがそれを拒んでいること、在インドネシアのオスマン帝国領事

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのイスリムの仲介者（山口）

が親オスマン帝国の宣伝を広めているとしてオランダが召還を求めていることが報じられている。この記事は匿名であるが、東南アジアのアラブ系住民が執筆した可能性が高い。なぜなら、「ジャワのムスリム」のうちオスマン帝国の国籍を得ようとしていたのは、主にアラブ系住民だったからである。オランダ統治下のインドネシアで、アラブ人は華人らとともに「外来東洋人 (Vreemde Oosterlingen)」に分類され、居住・移動に制限が課されるなど、法律や社会制度においてヨーロッパ人よりも下の地位に置かれていた。アラブ系住民はそのような待遇に不満を抱き、インドネシアで法的にヨーロッパ人として扱われたオスマン帝国の国籍の獲得を目指した「弘末 二〇〇四、一八二—一八三頁」。

『マナール』には、一九四〇年までに東南アジア関係の記事が一五〇件以上掲載されており、地域的にはインドネシアに関するものが多い。それらの記事は、出来事や事件を伝える報道記事、議論や主張を提示する論説記事、そしてファトワーに大別できる。ファトワーがその大部分の一三〇件以上を占める一方、東南アジアで起きた出来事を伝える報道記事は数件に過ぎない^⑮。東南アジアのムスリムがファトワーを求めた問題は、ヨーロッパ起源の服装や慣習、近代の科学技術によって生み出された新たな機器、東

南アジアの伝統的な社会・宗教慣行やイスラーム指導者の在り方などについてである。論説記事や報道記事としては、オランダによるインドネシアでの庄政を批判したり、東南アジア社会の後進的な状況の要因を論じるもの、東南アジアにおけるイスラーム教育などの改革運動について伝えるものがあげられる^⑯。

それでは、東南アジアのムスリムの中でどのような人々が、『マナール』に記事を執筆したのであるうか。執筆者が匿名のものやイニシャルしか書かれていないもの、執筆者の名前が判明しても経歴が明らかにならないものも少なくないが、二つのグループからの寄稿が目立っている。そのひとつは東南アジアのアラブ系住民であり、もうひとつがマッカやカイロなどアラブ地域に留学中もしくは留学経験のある現地ムスリムである^⑰。

前述のシンガポールのアラブ人、ムハンマド・ビン・アキールは、『マナール』と緊密な関係を持っていた。彼による最初の寄稿は、インドネシアにおけるオランダの抑圧に対抗する手段を講じた一八九九年の論説だと考えられる^⑱。もともと、ビン・アキールは、『マナール』の中でしばしば名前が言及されるものの彼が執筆した記事自体は少ない^⑲。むしろ、彼と『マナール』の関係において重視されるのは、東南アジア全域においてこの雑誌の流通を担った

ことである [Bluhm-Wann 1997, p. 297]。ビン・アキールが亡くなった際『マナール』に掲載された追悼文の中で、リダーは、「彼は、シンガポール、ジャワその他のインドネシアの島々でそれ（『マナール』）を広めるように配慮した。親愛の念と書簡のやりとりが、力強く、情熱をもって我々の間を結んでいた」と記している⁽¹⁷⁾。

『マナール』に頻繁に寄稿した東南アジアのアラブ系住民としては、ムハンマド・ビン・ハシム Muḥammad bin Ḥashim bin Tahir（一八八二―一九六〇）があげられる。ビン・ハシムはビン・アキールと同じくアラウィーであり、ハドラマウトで生まれ一九〇七年にインドネシアに移り住んだ。彼はスマトラのパレンバンでムナツワル学院 Madrasat al-Munawwar というマドラサ (madrasa) を開き、一九一四年にはアラビア語とムラユ語の二言語を用いた雑誌『バシール al-Bashīr』を創刊した。ここであるマドラサとは、二〇世紀に入り、東南アジアで開設されるようになった、学校制度を取り入れ非宗教科目も教える近代的なイスラーム教育機関のことである。一九一五年、ビン・ハシムはバタヴィアのアラブ人団体ジャムイヤート・ハイル Jam'iyat Khayr（「慈善協会」の意）に招かれ、この団体のマドラサの教師となった。彼はその後、プカロンガンの教育団体シャマール・アル＝フダー Shamā'il al-Hudā とス

ラバヤのハドラマウト・スホール Hadramaut School の設立で主導的な役割を果たし、それらのマドラサでも教鞭を執った。さらに、スラバヤでは、アラビア語定期刊行物『ハドラマウト Hadramawt』の編集に一九二〇年代半ばまで携わった⁽¹⁸⁾。

ビン・ハシムによる『マナール』への寄稿は一九一〇年前後に集中している。彼が最初に執筆したのは、一九〇七年に掲載されたムウジザ (muji'za、預言者にあられる奇蹟) に関するファトワーの要求である。後に彼は、地球の自転と公転、映画、電報といった科学的な知識や技術に関する質問もリダーに送っている。ビン・ハシムは、『マナール』の掲げるイスラーム改革主義の理念の熱心な賛同者であり、一九〇八年には『マナール』を称え、その敵対者たちを激しく批判する論説を執筆した⁽¹⁹⁾。また、一九一一年には、パレンバンにおけるイスラーム教育の近代化の試みを『マナール』で報告している⁽²⁰⁾。その記事でも、『マナール』が東南アジアにおけるイスラーム教育の改革の動きに多大な刺激を及ぼしたとする見解が述べられている。

『マナール』に頻繁に寄稿した東南アジアのムスリムのもう一つのグループが、アラブ地域への留学生・留学経験者である。ハドラマウトから東南アジアへの移民と同じよ

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

うに、東南アジアからアラブ地域に向かう留学生も、インド洋における蒸気船交通の発達によってその数が大幅に増加した [Laffan 2003, pp. 47-50]。東南アジア出身者はアラブ地域で、「ジャーウィー (Jawi)」、もしくは「ジャーワ (Jawa)」と総称された。イスラーム諸学を攻究しようとするジャーワのムスリムの遊学先は、一九世紀末までは主にマッカであった。二〇世紀に入ると、エジプトのカイロに向かう者の数も徐々に増え始め、一九二五年には二〇〇名以上が滞在していたと見積もられる [Roff 1970, pp. 73-74]。カイロが東南アジアの学生を引き付けるようになった理由としては、彼らがアラブ地域の政治運動に大きな関心を持っていたことやカイロがアラブ地域における近代的な教育・出版活動の中心地であったことがあげられる [Roff 1970, p. 74; Feener 2010, p. 66]。カイロには、スンナ派の教育活動の伝統的な拠点であるアズハル Azhar だけでなく、ダール・アル＝ウルム Dar al-Ulum（教員養成学校）やエジプト大学（現在のカイロ大学の前身）といった近代的な教育機関も開設されていた。

マッカとカイロに留学したムハンマド・バスユニ・イムラン Muhammad Basyuni Imran（一八八五～一九五三）は、『マナール』に最も多くの論考を執筆した東南アジアのムスリムである。⁽²³⁾ バスユニ・イムランは、西ボルネオの

サンバスの宮廷に代々仕えるウラマの家に生まれた。父親は、同地の最高位の宗教職であるマハラジャ・イマーム (Maharaja Imam) を務めた。彼は父親から初歩的な宗教教育を受けた後、一七歳の時にマッカに渡り、そこで約五年間学問を修めた。この時期にカイロのイスラーム改革主義運動に関心を持ち始めたようであり、一九〇六年にサンバスに戻ると、『マナール』を購読しリダーと書簡のやり取りをするようになった。一九一〇年、彼はカイロに赴き、アズハルに加えてリダーが開設していた「宣教と導きの学院 Dar al-Da'wa wa-l-Irshad」でも学んだ。⁽²⁴⁾ カイロには三年弱滞在し、一九一三年に帰郷すると父親の跡を継いでマハラジャ・イマームの地位に就いた。

バスユニ・イムランが『マナール』に最初に寄稿したのは、マッカからサンバスに戻った一九〇八年のことである。彼はその中で、イスラームにおける写真と絵画の規定の違いに関するファトワをリダーに求めた。⁽²⁵⁾ カイロから帰国した後も、宗教上の規定に関する彼からリダーへの質問は、継続的に『マナール』に掲載されている [Bruinessen 1992]。しかし、『マナール』への彼の寄稿の中で最も有名なのは、リダーを介してレバノン出身のイスラーム改革主義の思想家シャキーブ・アルスラーン Shaki' Arslan（一八六九～一九四六）に宛てられた質問である。バスユ

ニ・イムランはイスラーム世界の衰退の要因についてアルスラーンに尋ね、その返答は『マナール』に三回に渡って連載された。その内容は、後にアルスラーンの代表作『なぜムスリムは後進的となり、他の者たちは進歩したのか』として出版された²⁶⁾。

『マナール』に多く寄稿したのが、東南アジアのアラブ系住民とアラブ地域への留学生・留学経験者であったのは、彼らが高いアラビア語能力を持っていたためだと考えられる。この二つのグループは、いずれも蒸気船の利用がインド洋海上交通を発達させたことによって増加した。ただし、ここで注意すべき点は、寄稿者の中に主要なイスラーム団体に属する現地ムスリムの指導者の人物がほとんど見られないということである²⁷⁾。彼らの中にもマッカなどアラブ地域で長期間学んだ者は少なくなく、必ずしもアラビア語能力を欠いていたわけではない²⁸⁾。つまり、『マナール』がアラブ地域と東南アジアとの間に構築したネットワークでは、東南アジアのムスリムの側ではアラブ系住民や一部の留学生・留学経験者が仲介者に特化した役割を担っていたのである。

二 『ファトフ』のネットワークと東南アジアのムスリム

続いて、『ファトフ』が東南アジアとの間に構築したネットワークについて検討していくことにしたい。まず、この雑誌の概要と東南アジアとの関係について瞥見した後に、この雑誌における東南アジア側の執筆者と情報源について論じることにする。

『ファトフ』と東南アジア

『ファトフ』は、『マナール』とともに一九三〇年代のエジプトにおける代表的なイスラーム系定期刊行物の一つに数えられる「Gershoni and Jankowski 1995, p. 61」²⁹⁾。この雑誌は、カイロのサラフィーヤ出版社・書店 Dār al-Maḩabāʾ al-Salafiyya wa-l-Maktab-hā から発行され、その経営者ムヒッブディーン・アル＝ハティープ Muḩibb al-Dīn al-Khaṭīb (一八八六～一九六九) が主筆を務めた。創刊から二年間はアブドウルバーキー・スルール・ナイーム ‘Abd al-Bāqī Surūr Naʾīm というアズハルのウラマーが編集を担ったが、一九二九年に彼が亡くなった後はハティープが編集も務めた。創刊時は月刊であったがすぐに週刊になり、その後一九四〇年代途中から二週間に一回の発行に、最後は再び月刊に戻った [Jundi 1986, p. 6]。

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

ハティープは、ダマスカスのウラマーの名家に生まれたイスラーム改革主義の思想家、ジャーナリスト・出版人である^⑧。彼はまず故郷のダマスカスで、次いでベイルートとイスタンブルで、イスラーム諸学とともに法律など非宗教的な学問も学んだ。彼が師事し多大な影響を受けたのは、ダマスカス出身の思想家ターヒル・アル・ジャザーイリー *Tahir al-Jazā'irī*（一八五二～一九二〇）である。ハティープは一九〇九年にカイロに移ってサラフイーヤ書店 *Maktaba al-Salafiya* を開き、一九一二年から暫くの間はリダーのマナール書店と共同事業も行った。一九一六年に「アラブの反乱」を起こると、ハティープは、フサイン・ブン・アリー *Husayn ibn 'Alī* の招きにに応じてマッカで定期刊行物『キブラ *al-Qibla*』を編集し、後にダマスカスに移って『アーシマ *al-Āsima*』の編集にも携わった [*Ayalon* 1995, pp. 72, 83]。だが、最終的にハティープはシャリーフ・フサインと袂を分かち、彼と敵対していたイブン・サウード *Ibn Sa'ūd* を支持するようになる。彼は一九二〇年にカイロに戻り、一九二四年に『ザフラー *al-Zahrā'*』を創刊し、一九二六年から『ファトフ』の発行を始めた。

『ファトフ』と『マナール』は、主筆がエジプトに移住したシリア出身者である点で共通しており、主義や立場も近い。ただし、ハティープとリダーは、師事した人物が異

なることもあり、個人的な関係はそれほど親密でなかったとされる^⑨。また、『マナール』と『ファトフ』には、以下のような性格の違いがあった。すなわち、前者は、近代主義的な宗教指導者を主な対象とし、イスラーム世界の改革を担うエリート育成を目指した。これに対し、後者は、反西洋的な論調で政治的な問題を中心に扱い、イスラーム世界の情報を幅広い読者に伝えることに関心を示した。さらに、『ファトフ』は、一九二〇年代後半以降にカイロで結成されたイスラーム団体と直接的な関係を持っていた^⑩。ハティープはとりわけ一九二七年に結成されたムスリム青年協会 *Jam'iyyat al-Shubbān al-Muslimīn* の代弁者であり、『ファトフ』もこの団体の雑誌と見做されていた [*Gershoni and Jankowski* 1995, pp. 74, 80]。

『ファトフ』は、『マナール』と同じように、アラブ地域だけでなくインド、中国、東南アジアなどイスラーム世界の周縁地域にも流通し、それらの地域の読者が執筆した記事が数多く掲載された^⑪。アラブ地域の著名な寄稿者としては、リダーやアルスラーンに加え、ムスリム同胞団の創設者ハサン・アル・バンナー *Hasan al-Bannā*（一九〇六～四九）やエルサレムのムフティー（ファトワーを出す資格を持つ法学者）、アミン・アル・フサイニー *Amin al-Husaynī*（一八九三・九五・九七～一九七四）などがあげら

れる。周縁地域からは、以下で見る東南アジアのムスリムの他にも、中国人ムスリムの海維諒（アラビア語名はバドルッディーン Badr al-Din）（一九一二〜？）や馬堅（アラビア語名はムハンマド・マキーン Muhammad Makin）（一九〇六〜一九七八）らがしばしば論説を書いた。

『ファトフ』における東南アジアのムスリムによる最初の記事は、一九二七年に掲載されたアブドゥッラー・ビン・ヌフ Abdullah bin Nuh（一九〇五〜一九八七）によるハティープに宛てた質問である。ビン・ヌフは、西ジャワのチアンジュル出身で、この記事を書いた当時カイロに留学していた。彼は、オランダ人東洋学者スヌック・フルフロニーエの論説を読み、その中の以下の主張についてハティープに意見を求めた。すなわち、イスラームは女性を隷属させる宗教であり、女性の権利を侵害しているというもので、そして、汎イスラーム主義（al-jam'i'a al-Islamiya）の紐帯は、個別の民族のナショナリズムの興隆によって消滅しようとしているというものの二点である。

ハティープは、ビン・ヌフへの返答において、スヌック・フルフロニーエの主張に反駁を加えている。まず、女性をめぐる議論などムスリムの家族生活に生じている混乱は、一般大衆の無知や近代化がもたらしたものであって、本来のイスラームとは関係がない。インドネシアの女性が

男性に隷属しているのであれば、その責任はイスラームではなく、オランダ植民地政庁に帰するべきである。また、スヌック・フルフロニーエらヨーロッパ人の考える汎イスラーム主義は、誤った理解に基づいた、彼らの想像の中にだけ存在するものである。真の汎イスラーム主義の紐帯は、消滅するどころかますます強固になっており、ナショナリズムに取って代わられることなどない。むしろナショナリズム運動は、「イスラームの民衆間の文化的紐帯（rawābiṭ adabiya bayna al-shu'ub al-Islamiya）」を伴うことによってのみ成功が期待されるのである。

一九三〇年代に入ると、『ファトフ』には東南アジア関係の記事が定期的に掲載されるようになる。廃刊になる一九四八年までの間に掲載された東南アジア関係の記事は二〇〇件余りで、その大半はインドネシアに関するものである。^{③④}『マナール』と比べても多数の東南アジア関係の記事が掲載された要因として、『ファトフ』が週刊であり発行頻度が高かったことがあげられる。掲載された記事の種類としては、東南アジアで起きた出来事を伝える短い報道記事が多数を占める一方、ファトワーは少ない。^{③⑤}『マナール』に掲載された東南アジア関係の記事の大部分がファトワーで、報道記事が少ないのとは対照的である。このことは、宗教的な問題により強い関心を持った『マナール』と、

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

イスラーム世界の政治的な情報を伝えることを重視した『ファトフ』の性格の違いを反映している。さらに、『ファトフ』には、講演の記録や詩や短編小説といった文学作品も掲載されている^{③④}。

ハテীবは、「インドネシアの町で『ファトフ』の購読者がいないところは見つからない」とまで述べている[*Jundi* 1986, p.20]。実際に東南アジアでどれほどの部数が講読されていたのかを知ることは困難であるが、この雑誌が東南アジアの中でも特にインドネシアで広く読まれ、影響力を持っていたことは確かである。この雑誌の影響力を危惧したオランダ植民地政庁は、一九三一年一月初旬から少なくとも一九三二年二月終わりまでインドネシアへの持ち込みの禁止を試みている^{③⑤}。『ファトフ』の側にとってもインドネシアの購読者は無視できるものではなかった。一九四〇年五月にオランダがドイツによって占領されると、『ファトフ』はインドネシアの購読者に向けて告知を掲載し、オランダの通貨が銀行で両替ができなくなったので、郵便為替以外で購読料を支払わないよう求めた^{④⑥}。

東南アジア側の寄稿者・情報源

それでは、『ファトフ』に寄稿した東南アジアのムスリムについて見ていこう。名前と経歴が判明する限り、『マ

ナール』と同じく、アラブ系住民とアラブ地域への留学生・留学経験者がこの雑誌に多くの記事を執筆している。さらに、いくつかの報道記事では、東南アジアの定期刊行物などが情報源としてあげられている点にも着目したい。

アラブ系住民

東南アジアのアラブ系住民からの寄稿としては、一九三〇年代前半までは『マナール』と同じくアラウィーたちからものが目立つ。一九二七年にバタヴィアで結成されたアラウィーたちを代表する団体、アラウィー連盟 *al-Rabita al-'Alawiyā* の活動を伝える記事がしばしば掲載された^{④⑦}。『ムアイヤド』の寄稿者であったアリー・ビン・シハーブも、一九三〇年に『ファトフ』に論説を送り、オランダ植民地政庁によるムスリムに対する抑圧を批判している^{④⑧}。その一方、一九三〇年代半ば頃になると、アラウィー以外の東南アジアのアラブ系住民が執筆した記事も増えるようになる。頻繁に寄稿した人物としてあげられるのは以下の三名であり、いずれも『マナール』への寄稿は確認できない。

まず一人目は、ウマル・ナージー *Umar bin Sulaymān Najī* である。ナージーは、東南アジアのアラブ人コミュニティの中でアラウィーたちと対立関係にあったイルシャード *al-Ishād* という団体に所属していた。二〇世紀初頭、

東南アジアのアラブ系住民の間ではアラブ地域のイスラーム改革主義の影響を受けたグループがあらわれ、すべての信徒の平等という観点から血統に基づいたアラウィーたちの特権的な地位を否定するようになった。彼らが一九一四年にバタヴィアで、スーダン出身のウラマー、アフマド・スールカティー Ahmad Sūrkatī (一八七五／七六—一九四三) を指導者に迎えて結成したのがイルシャードである。イルシャードは、特にイスラーム教育の改革に取り組み、インドネシア各地にマドラサを開設した。ナージューは、スールカティーが教鞭を執ったイルシャードのバタヴィア校の第一期の卒業生で、教育者・ジャーナリストとして活躍した。^{④⑤}

ナージューが『ファトフ』に執筆した最初の記事は、アラウィーたちとの論争に関するものである。^④この論争は、リダーやアルスラーンらが仲裁を試みたこともあって、一九三〇年代半ばには概ね沈静化していた [Yamaguchi 2012, pp. 62-63]。ところが、ハティープは、一九三六年に東南アジアのアラブ人コミュニティで争点となった「サイイド (sayid, 「主人」の意)」というラカブ (laqab, 尊称) の適用に関する論説を『ファトフ』で発表した。^{④⑤}彼はその中で、このラカブは預言者ムハンマドの子孫のみに用いるべきとするアラウィー側の立場を支持する見解を示した。

これに対し、ナージューは、『ファトフ』に送った論説において反論を加え、イルシャードの立場を説明している。

だが、ナージューは、これ以降寄稿した記事では、東南アジアのアラブ人コミュニティ内の論争についてはもはや取り上げていない。彼はアラブ主義的な傾向を見せており、アラブ地域に係る問題に関心を向けている。一九三八年の論説では、日中戦争において中国側が主要都市を失ったことを引き合いに出しながら、アラブ地域のアラブ人が分裂した状況に危機感を示し、団結の必要を訴えている。^{④⑥}その翌年には、その年に収束し、パレスチナ側に大きな損害を出したアラブ大反乱に関する論説を執筆した。^{④⑦}

残り二人のアラブ系住民の寄稿者は、いずれもインドネシア生まれであるが、若い時期にアラブ地域に渡り、その後長い年月をエジプトで過ごしたハドラミーである。その一人、サラーフ・アル＝バクリー Salāh 'Abd al-Qādir al-Bakrī は、ナージューと同じくイルシャードのバタヴィア校を卒業した後、一九三一年にカイロに留学した。彼はそのままエジプトを活動の拠点としながら、ハドラマウトやマッカ、さらには一時期オランダにも滞在した。バクリーは、エジプトで教育関係の職に携わる傍ら、ハドラマウトや東南アジアのアラブ人コミュニティに関する歴史書を著した。^{④⑧}

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

東南アジアのハドラミーの間では、一九二〇年代後半以降になると、後進的な状況にあったハドラマウトの改革を求める議論が活発になっていた [Mobini-Keshneh 1999, chap. 6]。バクリーもハドラマウトに強い帰属意識を持っていたことは『ファトフ』に掲載された記事からうかがえる。一九三四年、カイロのジャマー・ア・アッ・タアールフ・アル・イスラーミー Jamā'a al-Ta'aruf al-Islāmī（「イスラーム親睦グループ」）というハティーブが設立した団体で、バクリーは講演を行った。その内容は、ハドラマウトの歴史や社会状況を紹介するものであり、その記録は『ファトフ』に掲載された。⁵⁴ 彼は一九三六年にも、ハドラマウトの改革や発展の必要性を訴える二本の論説を『ファトフ』に寄稿している。⁵⁵

インドネシアで生まれアラブ地域で活躍したもう一人のハドラミーは、アリー・バーカスィール *Alī Ahmad Ba Kahūr*（一九一〇～一九六九）である。⁵⁶ バークスィールは東ジャワのスラバヤに生まれ、その地でイルシャードが開設した学校で学んだ。彼は一〇歳になると教育のために父親とともにハドラマウトに渡り、サイウーンのおじのもとに預けられた。バークスィールは、その都市で新たに開設されたイスラーム学校、ナフダ・イルミーヤ学院 *Madrasat al-Nahda al-Ilmiya* に通い、卒業後は若くしてこ

の学校の運営を委ねられた。バークスィールは一九三四年にカイロに移住し、その地で数多くの詩・戯曲・小説を著し、アラブ文学界に名を残した。

バークスィールは、カイロに移る以前から『ファトフ』の主筆ハティーブと交流を持っていた。彼はカイロのイスラーム改革主義運動に傾倒し、ハドラマウトにいる時にリダーやハティーブと手紙のやり取りを始めた。ハティーブはバークスィールの文才を高く評価し、彼が最初に書いた戯曲、『フマーム、もしくは砂丘の都にて』を自身の出版社から発行している。⁵⁷ この戯曲はハドラマウトを舞台とし、その伝統的な社会を批判的に描いたものである。ただし、バークスィールは、ハドラマウトやアラブ地域だけでなくインドネシアへの関心も持ち続けた。『ファトフ』には、インドネシアのナショナリズム運動の指導者の一人、ストモ *Soetomo*（一八八八～一九三八）を称える彼の詩が二度掲載されている。最初の詩は、一九三六年にストモがカイロを訪れた際に、ムスリム青年協会で開催された歓迎の催しで詠まれたものである。第二の詩は、一九三八年にストモが亡くなった時にバークスィールが『ファトフ』に寄稿した。⁵⁸

アラブ地域への留学生・留学経験者

『ファトフ』に多くの記事を執筆したアラブ地域への留学生・留学経験者としては、まず次の二人があげられる。彼らも、上で見た三名のアラブ系住民と同じく、『マナール』への寄稿は認められない。その一人は、東南アジアのムスリムとしてこの雑誌に最初の記事を執筆したビン・ヌフである。⁽⁵³⁾彼はチアンジュルのウラマーの家に生まれ、幼少の時期にマッカに渡り、そこで二年間過ごした。インドネシアに帰国後、まずチアンジュルの父親のマドラサで学び、次いで一九一八年にプカロンガンに移って前述のビン・ハシムが教鞭を執るシャマール・アル・フダーに入学した。これ以降、ビン・ヌフはビン・ハシムに師事し、彼と行動を共にするようになる。一九二二年にビン・ハシムに従ってスラバヤに赴き、ハドラマウト・スホールで学ぶとともに教育にも携わった。スラバヤでは、『ハドラマウト』の編集も手伝ったとされる。一九二六年、ビン・ヌフはビン・ハシムやハドラマウト・スホールの他の学生とともにカイロに赴き、アズハルで二年間学んだ。

ビン・ヌフは、インドネシアに戻ってから『ファトフ』に記事を送り続けた。彼はこの雑誌に最も多くの寄稿をした東南アジアのムスリムであり、その内容は多岐に渡っている。⁽⁵⁴⁾一九三一年の論説では、再びナシヨナリズムの問題

を取り上げ、インドネシアにおけるイスラーム勢力と世俗的ナシヨナリストの対立について報告した。⁽⁵⁵⁾一九二〇年代末以降のインドネシアでは、両グループが独立運動のイデオロギーをめぐって激しく争っていた [Noer 1973, pp. 251-258]。この問題はアラブ地域でも大きな関心呼び、ハティーブやアルスラーンが世俗的ナシヨナリズムを批判する論説を執筆している。⁽⁵⁷⁾ビン・ヌフは、他の記事では、汎イスラーム主義やアラブ主義について論じたり、イスラーム文明を高く評価するヨーロッパ人を見解を紹介したりしている。⁽⁵⁸⁾さらに彼は、詩など文学作品も多く著しており、いくつかの短い小説を『ファトフ』で発表している。⁽⁵⁹⁾

アラブ地域に留学した東南アジアのムスリムでは、アブドゥル・カハル・ムザッキル Abdul Kahar Muzakir (一九〇八〜一九七三)も、『ファトフ』と緊密な関係を持っていた。⁽⁶⁰⁾カハル・ムザッキルは、一九三〇年代末から改革派のイスラーム団体、ムハマディヤ Muhammadiyah で活動し、日本軍政期以降はイスラーム高等教育の発展に貢献した人物である。⁽⁶¹⁾彼は中部ジャワのコタグデでウラマーの家系に生まれた。その地のムハマディヤの小学校に第二学年まで通った後、スラカルタのマンバア・アルウルム Manba' al-Ulum とプサントレン・ジャムサレン Pesantren Jamsaren ちに東ジャワのトレマス（トレマス）のプサントレン・ト

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

レマス Pesantren Tremas で学んだ。⁽⁶²⁾ 一九二五年、一六歳の時にカハル・ムザツキルはカイロに行き、二八歳までの一二年間を過ごした。彼は、ダール・アル・ウルームでイスラーム法、教育学、アラビア語とヘブライ語を修めた。

カハル・ムザツキルはカイロにおいて、ジャムイヤー・ハイリーヤ・ジャーウィーヤ al-jam'iya al-Khayriya al-Jawiya（ジャーワの慈善協会）、大インドネシア協会 Perhimpunan Indonesia Raya、ムスリム青年協会といった団体に参加したことが知られている [Nakanura 1977, p.2]。これらのうち、ジャムイヤー・ハイリーヤ・ジャーウィーヤは東南アジア出身の留学生、大インドネシア協会はインドネシア出身の留学生によって結成された団体である。⁽⁶³⁾ カハル・ムザツキルは、ジャムイヤー・ハイリーヤ・ジャーウィーヤで第一書記を務めていた際に、この団体の活動を『ファトフ』で紹介している。⁽⁶⁴⁾ 『ファトフ』の記事からは、彼がこれらの他にもいくつかのカイロの団体に係わっていたことが分かる。一九三二年に、イスラーム善導協会 Jam'iya al-Hidayah al-Islamiya が開いたエジプトに滞在している世界各地のムスリムの学生の親睦会で、カハル・ムザツキルが講演を行ったことが報じられている。⁽⁶⁵⁾ 一九三四年には、バクリーと同じくジャマア・アッ・タアルフ・アル・イスラミーでインドネシアのイスラームにつ

いて話をし、その内容が『ファトフ』に掲載された。⁽⁶⁶⁾

ただし、カハル・ムザツキルは、インドネシアに戻った後は『ファトフ』に寄稿をしていない。彼は帰国後ムハマディヤで若手の中心的人物として要職を担い、一九三八年にムハマディヤやブルシス Persis (Persatuan Islam, イスラーム統一協会) のメンバーが結成したインドネシア・イスラーム党 Partai Islam Indonesia でも委員を務めた [Noer 1973, pp. 158-159; Nakanura 1977, p.2]。カハル・ムザツキルと異なり、カイロから帰国後も『ファトフ』に寄稿を続けたヌフヤ『マナール』に多くの記事を執筆したバスユニ・イムランは、インドネシアの主要なイスラーム団体で大きな役割を果たしていない。東南アジアの現地ムスリムの指導的人物がほとんど寄稿しないということは、『マナール』だけでなく『ファトフ』についても言える。

なお、アラブ地域への留学生・留学経験者としては、バスユニ・イムランも、一九三〇年代後半以降に『ファトフ』にいくつかの論説を書いている。それらの中で彼が主に論じているのは、アラビア語をめぐる問題である。彼は以前からこの問題に強い関心を示しており、一九二八年には『マナール』において、非アラブ人がアラビア語を学ぶ義務及びクルアーンのムラユ語など他の言語への翻訳の是非に関して、リダーにファトワーを求めていた。⁽⁶⁷⁾ 一九三〇年代後

半には、『ファトフ』でも、クルアーンのアラビア語の翻訳の是非やイスラームにおける正則アラビア語の位置づけが議論となった。バスユニ・イムランは、リダーの見解に従って、クルアーンを他の言語に完全に翻訳することが不可能であることや、ムスリムの共通語としての正則アラビア語の重要性を唱えた。彼は、インドネシアが独立を宣言した後の一九四八年にも、クルアーンの翻訳に関する論説を『ファトフ』に送っている。^⑧

その他の情報源

『ファトフ』に掲載された東南アジアの出来事や事件を伝える報道記事には、執筆者は明記されていないが、東南アジアで発行された定期刊行物などが情報源としてあげられているものがある。そのような情報源として目立つのが、東南アジアでアラブ系住民によって編集・発行されたアラビア語の定期刊行物である。それらの記事では、東南アジアのアラブ人コミュニティだけでなく、現地ムスリムの活動も報じられている。一九二七年に掲載された、中部ジャワ、ジョグジャカルタのムハマディヤの学校に関する記事は、同地発行の雑誌『ムハマディヤの鏡 *Mir'at Muhammadiyah*』の記述に基づいている。^⑩これは、ムハマディヤによって発行された月刊誌で、ムハンマド・アリー・

クドウス Muhammad 'Ali Qodees（一九四三年没）という東南アジアに起源を持つマッカ出身者が編集を務めた。^⑪また、いずれもアラウィー系の定期刊行物であるスラバヤ発行の『ハドラマウト』とバタヴィア発行の『ラービタ *Rabitā*』も、いくつかの記事で情報源としてあげられている。例えば、一九三一年に掲載されたヨング・イスラミーン・ボンド Jong Islamieten Bond の大会とイスラーム系の日刊紙『ムステイカ *Mustika*』の創刊に関する記事は、それぞれ『ラービタ』と『ハドラマウト』が情報源である。^⑫

なお、『マナール』でも、一九二五年に、西ジャワのバイテンゾルフ（現ボゴール）で発行されたアラビア語の週刊誌『ウイフアーク *al-Wiṣāq*』に基づいて、オランダ植民地政庁によるムスリムの宗教儀礼に対する抑圧に関する記事が掲載された。^⑬東南アジアで発行されたアラビア語定期刊行物はアラブ地域にも流通し、東南アジアに関する情報を伝える役割を果たしていたことが分かる。

もう一つ注目したい点は、数は少ないものの、東南アジアで発行されたアラビア語以外の定期刊行物なども情報源としてあげられていることである。一九三三年に掲載されたアラブ人コミュニティ内の対立を伝える記事は、スラバヤ発行の華人系のインドネシア語紙『シン・ティト・ポー *Sin Tit Po*』に基づいたものである。^⑭また、一九三四年のジャ

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

ワの王族のマッカへの遊学についての記事の情報源は、バタヴィア発行のオランダ語日刊紙『ヤーファアー・ボーデ Java Bode』である。^⑧ さらに、オランダ領東インド軍のオランダ人指揮官が飛行機の墜落によって死亡したことを伝える一九四一年の記事は、ラジオ・バタヴィアの放送から情報を得ていた。^⑨ カイロにいる一般のアラブ人がインドネシア語やオランダ語を理解できたとは考えられず、『フアトフ』やハティープと近い東南アジア出身の留学生が編集に協力していたものと推察される。

おわりに

以上、『マナール』と比較しながら、『フアトフ』における東南アジア側の寄稿者・情報源について検討してきた。まず指摘できるのは、いずれの雑誌においても、アラブ系住民とアラブ地域への留学生・留学経験者からの寄稿が多いことである。さらに、東南アジア関係の記事で情報源としてしばしばあげられている東南アジアのアラビア語の定期刊行物も、アラブ系住民によって編集・発行されたものである。また、おそらくカイロに滞在する留学生は、東南アジアで発行されたインドネシア語やオランダ語の定期刊行物などの情報を『フアトフ』に提供していたと考えられ

る。これら二つの高いアラビア語能力を持つグループは、インド洋海上交通で蒸気船が普及し、東南アジアとアラブ地域の間の交流が活発になったことで増加した。アラブ地域の定期刊行物による東南アジアとの間のネットワークは、近代において広域的なコミュニケーションを促進したもう一つの科学技術である蒸気機関によって、さらに強固なものとなっていたのである。

ただし、ここで見過ごすべきではないのは、『マナール』でも『フアトフ』でも、主要なイスラーム団体に属する現地ムスリムの指導的人物からの寄稿がほとんど見られない点である。カイロ留学中は『フアトフ』と緊密な関係を持ちながら、インドネシアに帰国後ムハマディヤの主要なメンバーになると寄稿が見られなくなるカハル・ムザツキルは、このことを顕著に示している。したがって、東南アジアのムスリムの間では、現地ムスリムの指導的人物は東南アジア内の問題に専心し、アラブ系住民とアラブ地域への留学生・留学経験者の一部がアラブ地域との間の仲介者に特化した役割を担っていたものと考えられる。

もちろん、これらの指摘については、『マナール』と『フアトフ』以外の東南アジアに流入したアラブ地域の定期刊行物も検討していく必要がある。これら二つの雑誌で東南アジアのムスリムの頻繁な寄稿者がほとんど重複しないこと

に鑑みれば、他の定期刊行物ではまた異なる人物が記事を執筆していた可能性がある。また、本稿ではアラブ地域の定期刊行物における東南アジア側の寄稿者や情報源のみについて論じたが、それらの定期刊行物が東南アジアのイスラム運動に及ぼした影響についても検証しなければならぬ。現地ムスリムの指導的人物からの寄稿がほとんどないとはいえ、東南アジア関係の記事の多さやオランダ植民地政庁の『ファトフ』への警戒を考慮すれば、その影響力を過小評価すべきではないだろう。これらの点に関しては、稿を改めて論じることしたい。

参考文献

定期刊行物

- Al-Fatḥ* (Cairo 1926-1948).
Al-Manār (Cairo 1898-1936).

研究書・研究論文

- Abaza, Mona 1998: "Southeast Asia and the Middle East: Al-Manar and Islamic Modernity," in Claude Guillot, Denys Lombard and Roderich Peak (eds.), *From the Mediterranean to the China Sea: Miscellaneous Notes*, Wiesbaden: Harrassowitz, pp. 93-111
- 'Abd al-Jabbār, 'Umar 1982: *Siyar wa-Tarājim Ba'ḍ 'Ulamā' nā fi al-Qarn al-Rābi' 'ashr li-l-Hijra*, 3rd ed., Jeddah: al-Kitāb al-'Arabi al-Sa'ūdi.
- 'Abū Shawk, Ahmad Ibrāhīm (ed.) 2006: *Al-Āthār al-Kāmila li-Majallat al-Manār 'an Junūb Sharq Āsiyā (1898-1945)*, 2 vols., Kuala Lumpur: Research Centre International Islamic University Malaysia.
- _____, (Abushouk, Ahmad Ibrāhīm) 2009: "Al-Manār and the Hadhrami Elite in the Malay-Indonesian World: Challenge and Response," in Ahmad Ibrāhīm Abushouk and Hassan Ahmad Ibrāhīm (eds.), *The Hadhrami Diaspora in Southeast Asia: Identity Maintenance or*

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

- Assimilation*, Leiden and Boston: Brill, pp. 159-189.
- Abū al-Anwār, Muḥammad 1943: *Tārīkh al-Irshād wa-Shaykh al-Irshādīyīn al-'Allāmah al-Shaykh Ahmad Muḥammad al-Anṣārī*, Ms.
- Abū al-Khayr, 'Abd Allāh Mirdād [Muḥammad Sa'īd al-Amūdī and Ahmad 'Alī (eds.)] 1986: *Al-Mukhtaṣar fī Kitāb Nashr al-Nūr wa-l-Zahar fī Tarājim Afādīl Makka fī al-Qarn al-'Āshir wa-l-Rābi'* *ashar*, Jeddah: 'Ālam al-Ma'rifa.
- Antonio, Muhammad Syafi and Team Tazkia 2015: KH. Abdullah bin Nuh: Ulama Sederhana Kelas Dunia (Ulama, Tentara, Pendidik, Sejarawan, Sastrawan, Pemikir *Ekonomi, Jurnalis*), Jakarta: Tazkia Publishing.
- Ayalon, Ami 1995: *The Press in the Arab Middle East: A History*, New York: Oxford University.
- Azra, Azyumardi 1999: "The Transmission of *al-Manār's* Reformism to the Malay-Indonesian World: The Cases of *al-Imam* and *al-Munir*," *Studia Islamika* 6/3: pp. 77-100.
- Bakrī, Ṣalāh al- 1935-1936: *Tārīkh Ḥaḍramawt al-Siyāsī*, 2 vols, Cairo: Muṣṭafā al-Bābī al-Ḥalabī.
- , 1992: *Tārīkh al-Irshād fī Indūniṣiyā*, Jakarta: Jam'iyyat al-Irshād al-Islāmīya.
- Berg, L. W. C. van den 1886: *Le Hadhrāmout et les colonies arabes dans l'archipel indien*, Batavia: Imprimerie du Gouvernement.
- Bluhm, Jutta E. 1982: "A Preliminary Statement on the Dialogue Established between the Reform Magazine al-Manār and the Malayo-Indonesian World," *Indonesia Circle* 32: pp. 35-42.
- Bluhm-Warr, Jutta 1997: "*Al-Manār* and Ahmad Soorkattie" in Peter G. Riddell & Tony Street (eds.), *Islam: Essays on Scripture, Thought and Society: A Festschrift in Honour of Anthony H. Johns*, Leiden: Brill, pp. 295-308.
- Bruinessen, Martin van 1992: "Basyuni 'Imran," in Marc Gaboriau (ed.), *Dictionnaire biographique des savants et grandes figures du monde musulman périphérique, du XIXe siècle à nos jours*, vol. 1, Paris: CNRS-EHESS, p. 26.
- Burhanudin, Jaiat 2005: "Aspiring for Islamic Reform: Southeast Asian Request for Fatwās in al-Manār," *Islamic Law and Society* 12/1: pp. 9-26.
- Chen, John 2018: "Islam's Loneliest Cosmopolitan: Badr Al-Din Hai Weiliang, the Lucknow-Cairo Connection, and the Circumscription of Islamic Transnationalism," *ReOrient* 3/2: pp. 120-139.
- Feener, Michael 2010: "New Networks and New Knowledge: Migrations, Communications and the Muslim Community in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries," in Robert W. Heffner (ed.), *The New Cambridge History of Islam*, vol. 6, *Muslims and*

- Modernity: Culture and Society since 1800*, Cambridge University Press, pp. 39-68.
- Freitag, Ulrike 1997: "Dying of Enforced Spinsterhood: Hadramawt through the Eyes of 'Alī Ahmad Bā Kathīr (1910-69)," *Die Welt des Islams* 37/1: pp. 2-27.
- , 2003: *Indian Ocean Migrants and State Formation in Hadramaut: Reforming the Homeland*, Leiden: E. J. Brill.
- Gelvin, James L. and Nile Green (eds.), 2014: *Global Muslims in the Age of Steam and Print*, Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press.
- Gershoni, Israel and James P. Jankowski 1995: *Redefining Egyptian Nation, 1930-1945*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibb, H. A. R. 1953: *Mohammedanism: An Historical Survey*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Ḥamīd, Muḥammad Abū Bakr n.d.: *Indūsiyyā: Maḥlāmāt al-Ḥubb wa-l-Hurriyya fī Ḥayāt 'Alī Ahmad Bā Kathīr*, Cairo: Markaz Ḥadramawt li-Nashr wa-l-Dirāsāt wa-l-Abḥāth.
- 井筒俊彦訳一九六四:『コーラン』(全三巻) 岩波書店。
- 弘末雅士二〇〇四:『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序』岩波書店。
- Hisyam, Muḥamad 2001: *Caught between Three Fires: The Javanese Pangulu under the Dutch Colonial Administration 1882-1942*, Jakarta: INIS
- Ingrams, W. Harold 1936: *A Report on the Social, Economic and Political Condition of the Hadramaut*, London: His Majesty's Stationery Office.
- Jundī, Anwar al- [1986]: *Tārīkh al-Ṣiḥāfa al-Islāmiya. vol. 2: Al-Fatḥ-Muḥibb al-Dīn al-Khaṭīb 1926-1948*, Cairo: Dār al-Anṣār.
- Kāf, Alī b. Amīs al- (comp. and commented) 2008: *Mukhtārāt min Kitābāt Shaykh al-Ṣiḥāfa al-Ḥadramiyya al-Ustādh Muḥammad b. in Ḥāshim*, Tarīm li-l-Dirāsāt wa-l-Nashr.
- 小杉泰一九九四:『現代中東とイスラーム政治』昭和堂。
- Laffan, Michael Francis 2003: *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma Below the Winds*, London: Routledge.
- , 2007: "Another Andalusia: Images of Colonial Southeast Asia in Arabic Newspapers," *The Journal of Asian Studies* 66/3: pp. 689-722.
- Lauzière, Henri 2010: "The Construction of Salafiyya: Reconsidering Salafism from the Perspective of Conceptual History," *International Journal of Middle East Studies* 42: pp. 369-389.
- Matsumoto Masumi 2006: "Rationalizing Patriotism among Muslim Chinese: the Impact of the Middle East on the Yuehua journal," in in Stéphan A. Dudoignon, Komatsu

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

- Hisao and Kosugi Yasushi (eds.), *Intellectual in the Modern Islamic World: Transmission, Transformation, Communication*, London and New York: Routledge, pp. 117-142.
- Mayeur-Jaouen, Catherine 2002: "Les débuts d'une revue néo-salafiste: Muhibb al-Dīn al-Khathīb et Al-Fath de 1926 à 1928," *Revue du monde musulman et de la Méditerranée*, 95-98: pp. 227-256.
- Mobini-Kesheh, Natalie 1996: "The Arab Periodicals of the Netherlands East Indies, 1914-1942," *Bijdragen tot de Taal, Land- en Volkenkunde* 152/2: pp. 236-256.
- , 1999: *The Hadrami Awakening: Community and Identity in the Netherlands East Indies, 1900-1942*. Ithaca: Cornell University Press.
- Nāḥi, 'Umar Sulaymān n. d.: *Tārīkh Thawrat al-Iṣlāḥ wa-l-Irshād bi-Indawmaysiyā*, vol. 1.
- Nakamura, Mitsuo 1977: "Professor Hajj Kahar Muzakir and the Development of the Muslim Reformist Movement in Indonesia," in Benedict R. O'G. Anderson, Mitsuo Nakamura, and Mohammad Slamet, *Religion and Social Ethos in Indonesia*, Melbourne: Monash University, pp. 1-20.
- Noer, Deliar 1973: *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*, Singapore and Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Pijper, G. F. 1977: *Studien over Geschiedenis van de Islam in Indonesia 1900-1950*, Leiden: E. J. Brill.
- Roff, William R. 1970: "Indonesian and Malay Students in Cairo in the 1920's," *Indonesia* 9, pp. 73-87.
- Salam, Solichin 1992: *Ali Ahmad Shahab : Pejuang Yang Terlupakan*, Jakarta: Gema Salam.
- Serjeant, R. B. 1962: "Historians and Historiography of Hadramawt," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 25/2: pp. 239-261
- Vollstellig 1930*, vol. 7, Batavia: Landsdrukkerij, 1935.
- Yamaguchi, Motoki 2012: "Debate on the Status of Sayyid-Sharifs in the Modern Era: The 'Alawī-Irshādī Dispute and Islamic Reformists in the Middle East", in Morimoto Kazuo (ed.), *Sayyid-Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet*, London and New York: Routledge, pp. 49-72.
- Zaman, Muhammad Qasim 1998: "Arabic, the Arab Middle East, and the Definition of Muslim Identity in Twentieth Century India," *Journal of the Royal Asiatic Society* 8/1: pp. 59-81.

註

- (1) 本研究の実施においては、松下幸之助記念財団から助成を受けた。ここに記して感謝の意を表する。
- (2) 以下、本稿でアラブ地域の定期刊行物という場合、アラビア語を用いたもののみを指すことにする。もちろん、アラブ地域では他の言語による定期刊行物も発行されていた。
- (3) 『マナール』に掲載された東南アジア関係の記事は史料集としてまとめられている[Abū Shawk 2006]。
- (4) ファトワーとは、公人あるいは私人の依頼に応じて資格のあるウラマーから出される法学上の問題に関する意見・勧告のことである。本来は非公式なものであり法的な拘束力を持たない。
- (5) これらの研究の他に、Abushouk[2009]は、『マナール』が東南アジアのアラブ系住民のイスラーム運動に及ぼした影響について検討している。
- (6) この点については、上述のラッファンの研究やJundi[1986]を参照。さらに、拙稿からは、二十世紀前半に東南アジアのアラブ人の間で起こった論争に関する記事が『ファアトフ』に掲載されたことが分かる[Yamaguchi 2012]。
- (7) 本稿では、オランダのライデン大学図書館及び京都大学所蔵の『ファアトフ』を用いた。この雑誌はエジプトの国立図書館ダール・アル＝クトゥブ Dar al-Kutubにも所蔵されているが、欠落している号が非常に多い。
- (8) アラブ地域におけるアラビア語定期刊行物の歴史に関しては、Ayalon[1995]で詳しく論じられている。
- (9) アリー・ブン・シハーブは、一九〇一年頃にバタヴィアでアラブ系住民が結成したイスラーム団体ジャムイーヤト・ハイル Jam'iyat Khayr(「慈善協会」)の設立メンバーの一人で、一九〇五年にこの団体がオランダ植民地政府から承認を受けた際に会長職にあった。ビン・シハーブは、前述のサマール・アル＝フヌーンにも寄稿していたとされる [Salam 1992, pp. 11-14, 23]。
- (10) 『ムアイヤド』とアリー・ユースフに関しては、Ayalon[1995, pp. 233-237]を参照せよ。
- (11) "Al-Muslimūn fī jāwā," *al-Manār* 1/33 (November 28, 1899): p. 628.
- (12) ブルームは、『マナール』には東南アジアのムスリムが執筆した一六一件(うち一三五件はファトワーの要求)の記事が掲載されたとし、アバザはそれにいくつか補足を加えている [Bluhm-Warn 1997; Abaza 1998]。他方、アブー・シャウクが編んだ史料集には、合計一二七件の記事が収録されている [Abū Shawk 2006]。彼はブルームらと異なり、東南アジアに関してリダーらアラブ地域側の人物が著した論説も取り上げている。
- (13) 『マナール』に掲載された東南アジア関係のファトワー、記事、論説の分類については、Bluhm[1982]、Abaza[1998]、Abū Shawk[2006]、Burhanudin[2005]を参考にした。
- (14) 『マナール』における東南アジア側の寄稿者については、ファトワーに関する Burhanudin[2005]も参照。本稿では東南アジアのアラブ系住民として一括して扱うが、彼らの中にもアラブ地域に留学した者は少なくない。[Freitag 2003, pp. 53-54]。
- (15) "Al-Shakwā min ḡalim Ḥilāndā," *al-Manār* 2/32 (October 21, 1899): pp. 508-511. 署名にはナーシール・アッ＝ディーン

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのイスラームの仲介者（山口）

- Nāsir al-Dīnとあるが、アブー・シャウクはこれはビン・アキールの筆名だと判断している[Abū Shawk 2006, vol. 1, p.464]。
- (16) 管見の限り、上記の論説以外にビン・アキールが『マナー』に寄稿したのは一九〇五年に掲載された「啓典の民[ahl al-kitāb, 主にキリスト教徒やユダヤ教徒のこゝ]」の属した肉に関するファトワの要求のみである。“Dhabāḥi Ahl al-Kitāb fī ‘Asr al-Tanzīl,” *al-Manār* 8/7 (June 4, 1905): pp. 254-256.
- (17) “Al-Sayyid Muhammad bin ‘Aqīl,” *al-Manār* 32/3 (March 1932, 1932): p. 238.
- (18) 以上、ミン・ホーシムの経歴については、Mobini-Kesheh [1996, pp. 239, 250]、Kāf [2008, chapter 1] に基づく。
- (19) “Al-Karāma wa-al-Mu‘jiza,” *al-Manār* 10/2 (April 13, 1907): pp. 115-117.
- (20) “‘Asīla min jāwa,” *al-Manār* 12/4 (May 19, 1909): pp. 260-270.
- (21) “Kalimāt al-Manār,” *al-Manār* 11/8 (September 25, 1908): pp. 598-600.
- (22) “Ḥālat al-Muslimīn fī jāwa wa-l-islāh,” *al-Manār* 14/12 (December 20, 1911): pp. 821-827.
- (23) ‘ハスヌニ・イムランの経歴については、Pijper [1977, pp. 134-141]、Bruinessen [1992] に基づく。
- (24) リダーの学院は、イスラーム知識人・指導者の育成のために一九一一年に開設されたが、第一次世界大戦の勃発により閉鎖されてしまった[小杉一九九四、一六一頁]。
- (25) “Ḥukm Šuwar al-Yad wa-l-Šuwar al-Shamsiyya,” *al-Manār* 11/4 (May 30, 1908): pp. 277-278. リダーは写真について、
- イスラームが忌避する手書きの絵画と異なるものではないとして、少なくともこの時点では否定的な見解を述べている。
- (26) “Li-Mādhā Ta’akkhara al-Muslimūn wa-li-Mādhā Taqadama Ghayr-hum,” *al-Manār* 31/5 (December 20, 1930): pp. 353-354; *Ibid.* 31/6 (January 19, 1931): pp. 439-464; *Ibid.* 31/7 (February 18, 1931): pp. 529-539.
- (27) 例外としては、西スマトラのアブドゥッラー・アフマド Abdullah Ahmad (一八七八—一九三三) がファトワを求めている。彼は前述のイスラーム系定期刊行物『ムニール』の主筆で、イスラーム教育の改革にも取り組んだ。“‘Asīla min Fūdūq Fādāgh, jāwa,” *al-Manār* 14/9 (September 23, 1911): pp. 674-699.
- (28) 例えば、ムハマディヤの設立者アフマド・ダフラン Ahmad Dahlan、ナフダトゥル・ウラマーの初代総裁ハシム・アシユアリ Hasyim Asyari、イスラーム同盟 Sarekat Islam の理論的指導者アグス・サリム Agus Salimらは、いずれもマッカなどアラブ地域で長期間学問を修めた[Noer 1973, pp. 73-74, 110, 229; Laffan 2003, pp. 182-185]。
- (29) 誌名は「裁き」という意味で、クルアーン七章八九節の文言「おお主よ、我々とこの我々の一族との間を真実もてお裁き下さい。貴方こそ最上の判決者でいられます」からとったものである(井筒俊彦訳)。ほとんどの定期刊行物と同様、『ファトフ』の正確な発行部数を明らかにすることは難しい。一九二〇年代末にエジプトで発行された定期刊行物の発行部数が大体一万部から二万部と見積もられるので、『ファトフ』も同程度であったと推察される[Ayalon 1995, pp. 145-

154]。

- (30) ハティープの経歴と思想に関しては、Lauzière [2010] に基づく。

- (31) ハティープの書店は、一九一七年にサラフィーヤ書店・雑誌 *al-Maktaba wa-l-Majalla al-Saʿfiya* に、一九二〇年にサラフィーヤ出版社・書店に改称した。

- (32) ただし、ハティープは、アブドゥフに直接師事したわけではないが、彼の著作は読んでいた [Lauzière 2010, p. 377]。

- (33) リダーとハティープの関係及び『マナール』と『ファトフ』の相違点については、Mayer-Jaouen [2002] を参照。

- (34) インドのラクナウーのイスラーム団体ナドワトウル・ウラマー *Nadwat al-Ulama* では、『ファトフ』を始め数多くのアラブ地域発行の定期刊行物が読まれていた [Zaman 1998, p. 66]。中国ムスリムに関しては、Matsumoto [2006, p. 128]、特に海維諒に関しては、Chen [2018] を参照。中国では、北平（北京）で発行されたイスラーム改革派の定期刊行物『月華』に『ファトフ』の記事の翻訳がしばしば掲載された。

- (35) “Hādīr al-Islām wa-Mustaqbal-hu: Al-Islām wa-Hayāt al-Uṣra, al-Qawmiyyāt wa-l-Jamīʿa al-Islāmiyya, Mustaqbal al-Islām,” *al-Faṭḥ* 32 (January 20, 1927): pp. 1-4.

- (36) 東南アジア関係の記事という定義には困難が伴う。『ファトフ』には、他の地域について論じる中で東南アジアに言及している記事や、執筆者は東南アジア出身であるがアラブ地域に移住し、内容も東南アジアと関係のない記事も掲載されている。

- (37) 管見の限りでは、ファトワーとして掲載されたのは、ザ

カート (*zakāt*, 義務の喜捨) とタルキーン (*talqīn*, 葬儀の際にイスラーム教義を死者に読み上げる慣習) に関する二つのみである。“Suʿlān fī al-Zakāt,” *al-Faṭḥ* 190 (March 13, 1930): p. 5; “Jawāb Suʿlāyn fī al-Zakāt,” *al-Faṭḥ* 202 (June 5, 1930): p. 14; “Talqīn al-Mayyit baʿda Daḥn-hu,” *al-Faṭḥ* 249 (May 7, 1931): p. 7. その他に、東南アジアのムスリムからは、前述のビン・ヌフの質問のように、政治的・社会的な見解を求める記事も送られている。

- (38) 講演の記録を書いたのが講演者本人でない可能性も充分に考えられるが、本稿では講演者を執筆者と扱うことにする。

- (39) “Li-mādhā Muniʿa al-Faṭḥ ‘an Jawā: Al-Muʿtamar al-Thānī li-al-Lajna al-Islāmiyya fī Indūsiyā, Maqāla Jadīda li-al-Uṣādh Snūk Hūrhrūnīa,” *al-Faṭḥ* 288 (February 26, 1932): p. 7. の論説によれば、『ファトフ』の持ち込みが禁止された直接の契機は、インドネシアで起きたイタリアによるリビアのトリポリ侵攻に対する抗議行動であった。この抗議行動への参加者は、『ファトフ』からリビアにおける情報を得ていたとされる。

- (40) “Ilā mushṭarīkī al-Faṭḥ fī Indūsiyā,” *al-Faṭḥ* 707 (May 23, 1940): p. 15.

- (41) 例えは、“Al-Rabīʿa al-ʿAlawīya fī Jawā,” *al-Faṭḥ* 222 (October 24, 1930): p. 10; “100 Junayh li-Muslimīn Filasṭīn min al-Muslimīn fī Jawā,” *al-Faṭḥ* 185 (February 6, 1930): p. 13 があげられる。

- (42) “Kull-hum Sawā: Qānūn li-Ghayr al-Muslimīn wa-Qānūn li-l-Muslimīn,” *al-Faṭḥ* 227 (November 27, 1930): p. 3.

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者（山口）

- (43) ナージーの経歴に関しては、Najī [n.d., pp. 120, 126]、*Anwār* [1943, pp. 299-300] を参照せよ。
- (44) *Alqāb al-Sharāf li-l-Islām, al-Fatḥ* 491 (April 2, 1936): pp. 18-21. ナージーが主に論じているのは、「サイヤイド(sayyid, 「主人」の意)」というラカブ(laqab, 尊称)の適用の問題である。このラカブは、従来は預言者の子孫にのみ用いられてきたが、イルシャーードは、一九三一年にこのラカブを男性の一般的な敬称とすることを決定し、アラウィー側は反発した [Yamaguchi 2012, pp. 53-56]。
- (45) *“Al-Sayyid...,” al-Fatḥ* 480 (January 16, 1936): p. 12.
- (46) *“Kayfa Taḡid al-Umam Awṭān-hā, al-Fatḥ* 631 (December 9, 1938): pp. 6-7.
- (47) *“Nakba Filasṭīn: Yurīd Allāh bi-hā Khayr li-l-Muslimīn,” al-Fatḥ* 639 (February 3, 1939): pp. 6-7.
- (48) バクリーの経歴に関しては、Serjeant [1962, pp. 249-250]、Bakrī [1992, p. 177] に基づく。彼の著作の中で最も有名なのが、『ハンニヤット政治史 *Tārīkh Ḥanḡramawt al-Syāsī*』である [Bakrī 1935-1936]。
- (49) *“Ḥadramawt (al-Aḡqāf) [1],” al-Fatḥ* 415 (October 5, 1934): pp. 18-19, 23; *“Ḥadramawt (al-Aḡqāf) 2,” al-Fatḥ* 416 (October 11, 1934): pp. 20-22; *“Ḥadramawt (al-Aḡqāf) 3,” al-Fatḥ* 417 (October 18, 1934): pp. 20-21; *“Ḥadramawt (al-Aḡqāf) 4,” al-Fatḥ* 419 (November 1, 1934): pp. 20-22. シヤビーブ・ハニム・タールフ・アル・ハニスラーシーは、世界中のムスリムの相互理解を深める目的で一九三四年初めに設立され、事務局は『フアトフ』の事務所に置かれた [Chen 2018, pp. 131-132]。
- (50) *“Ḥadramawt Tataḡaffaz li-l-Nuḡd,” al-Fatḥ* 507 (July 23, 1936): pp. 12-13; *“Ḥadramawt: Kull-nā li-l-Waṭan,” al-Fatḥ* 508 (July 30, 1936): p. 5.
- (51) ベーカスミールの経歴については、Freitag [1997]、*Hamīd* [n.d.] を参照。
- (52) *“砂丘 al-Aḡqāf”* とはクルアーン四六章の名前で、ここにはベダヴィヤウトの意を意味する。ベーカスミールのこの戯曲については、Freitag [1997] で論じられている。
- (53) *“Taḡyā al-Dukṭur Sūtūmū,” al-Fatḥ* 514 (September 11, 1936): pp. 6-7; *“Dhikrā Sūtūmū,” al-Fatḥ* 611 (July 21, 1938): pp. 16-17.
- (54) ハンニヤット・ハン・スフの経歴については、Antonio and Team Tazkia [2015] に基づく。
- (55) 『フアトフ』が発行された一〇年が過ぎた一九三七年に、ハン・スフは『フアトフ』に関係する人物として写真付きで紹介されている。“Abd Allāh bin Nuḡ al-Indūst,” *al-Fatḥ* 551 (May 28, 1937): p. 31.
- (56) *“Al-Islām fī Indūsiyā: Niḡāl bayna al-Ḥarakat al-Dīniya wa-l-Waṭaniya al-Mujarrada, Taḡaqur al-Malāḡiḡda anāma jaysh al-Islām,” al-Fatḥ* 241 (March 5, 1931): pp. 8-9.
- (57) ハニヤット・アル・スラーンの論説については、例えばそれ以外のものがあげられる。“Al-Ḥarakāt al-Wataniya fī al-Sharq al-Islāmiya : wa-Mawāṭīn al-Zalāl fī Rasm Manāḡil-hā: Kalimat Iḡlāṡ li-Zu‘amā’ al-Aḡzāb al-Syāsiya bi-Munāsabat Mā Nasharnā-hu al-Yawma ‘an Andūsiyā,” *al-Fatḥ* 228 (December 4, 1930): pp. 1-3; “Al-Waṭaniya al-Iḡḡādiya al-Fāsida,” *al-Fatḥ* 337 (February 5, 1931): pp. 1-2.

- (58) 汎イスラーム主義については、*“Al-Ālam al-Islāmī Watan Wāhid,” al-Fatḥ* 402 (July 6, 1934): pp. 16-17。アラブ主義に關しては、*“Al-Ittiḥād al-‘Arabī wa-l-Wahda al-‘Uzma,” al-Fatḥ* 510 (August 13, 1936): pp. 3-4。ベン・ヌフが紹介したのは、インドネシア生まれのオランダ人建築家で、イスラームに改宗したケマル・ヴォルフ・スフマーケル Kemal C. P. Wolff Schoemaker による著作である。スフマーケルは、インドネシアのイスラーム運動の指導的人物となるムハンマド・ナシル Muhammad Natsir とともに『イスラーム文化 Cultuur Islam』を執筆した。*“Ra’i ‘Alim Gharbī fī al-Madaniya al-Islāmiya,” al-Fatḥ* 635 (January 5, 1939): pp. 10-11。
- (59) 例えは、*“Qissa Khayālīya: Al-Qarya al-Šāliha,” al-Fatḥ* 565 (September 3, 1937): pp. 6-7 など。
- (60) カハル・ムザッキルの経歴については、Nakamura [1977] で詳しく論じられている。
- (61) カハル・ムザッキルは、一九四五年七月にジャカルタで設立されたイスラーム高等機関 Sekolah Tinggi Islam の開設に携わった。後にこの学校はジョグジャカルタに移り、インドネシア・イスラーム大学 Universitas Islam Indonesia, UII と名前を変える。彼は亡くなるまでそこで教鞭を執った。さらに、彼はジョグジャカルタのイスラーム宗教大学 Institut Agama Islam Negeri, IAIN の設立にも関与した [Nakamura 1977, p. 3]。
- (62) マンバア・アルウルムは、ペンフル (penghulu, 宗教官吏) の養成を目的に一九〇五年に設立され、インドネシアで最も古いマドラサ・タイプのイスラーム教育機関とされる。プサントレン・ジャムサレンは、一八世紀に設立され、スラ
- カルタの王族や貴族が学んだ [Hisyam 2000, pp. 137, 140-145]。
- (63) ジャマイヤー・ハイリーヤー・ジャーウウィヤーは一九二二年に結成された。正式名称は、*“ジャワのアズハル学生のための慈善協会 al-Jam’iyya al-Khayriyya li-l-Ṭalaba al-Azharīya al-Jāwīya”* であるが、略称で表記されることが多い。大インドネシア協会は、一九三三年にカイロで結成された団体で、オランダでインドネシアからの留学生が結成したインドネシア協会 Perhimpunan Indonesia の姉妹組織である。カハル・ムザッキルが最初の会長を務めた。
- (64) *“Al-Jam’iyya al-Khayriyya al-Jāwīya,” al-Fatḥ* 331 (February 10, 1933): p. 14。
- (65) *“Al-Ṭalaba al-Sharqiyyūn fī Dār al-Hidāya al-Islāmiya,” al-Fatḥ* 323 (December 16, 1932): p. 4。
- (66) *“Al-Islām fī Indūniyā wa-Aḥwāl Muslīmī-hā wa-Nahḍat-hum al-Hadītha [1],” al-Fatḥ* 406 (August 3, 1934): pp. 6-7; *“Al-Islām fī Indūniyā wa-Aḥwāl Muslīmī-hā wa-Nahḍat-hum al-Hadītha [2],” al-Fatḥ* 407 (August 10, 1934): pp. 16-18; *“Al-Islām fī Indūniyā wa-Aḥwāl Muslīmī-hā wa-Nahḍat-hum al-Hadītha [3],” al-Fatḥ* 408 (August 17, 1934): pp. 21-23; *“Al-Islām fī Indūniyā wa-Aḥwāl Muslīmī-hā wa-Nahḍat-hum al-Hadītha [4],” al-Fatḥ* 410 (August 31, 1934): pp. 18-19, 22; *“Al-Islām fī Indūniyā wa-Aḥwāl Muslīmī-hā wa-Nahḍat-hum al-Hadītha [5],” al-Fatḥ* 411 (August 7, September, 1934): pp. 8-11。
- (67) *“Aḥamm Mā Yajib ‘alā Muslīmī al-A‘jām min al-Lughā al-‘Arabīya,” al-Manār* 29/9 (February 10, 1928): pp. 661-663。
- (68) *“Al-Khawḍ fī Ḥadīth Tarjamat al-Qur’ān,” al-Fatḥ* 506 (July 17,

アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのイスラームの仲介者（山口）

1936): pp. 6-7.

- (69) "Al-Lughā al-'Arabiya al-Fuṣṭāḥiyya Lughat al-Qur'ān wa-Hiya Lughat al-Islām," *al-Faṭḥ* 853 (Rabī' al-Thānī, AH1367 [February-March 1948]): pp. 17-18.

- (70) "Madāris-nā," *Madrasat al-Jam'iya al-Muhammadiya fi Jukākartā*, "Madrasat al-Muallimīn fi Jukākartā," *al-Faṭḥ* 62 (September 15, 1927): p. 13. "Nashr al-Dwa al-Islāmiya fi Bilād Jawa," *Faṭḥ* 62 (September 15, 1927): p. 15; "Fi Jawa," *Faṭḥ* 90 (April 5, 1928): p. 5.

- (71) ムハンマド・アリー・クドウスは、東南アジアに起源を持ちマッカで活躍したウラマー、アブドウルハシード・クドウス 'Abd al-Hamid Qudus (一八六〇／六一・一八六三／六四・一九一五／一六) の息子である。ムハンマド・アリー・クドウスはインドネシアに渡り、ムハマディヤの学校の教師となった ['Abd al-Jabbār 1982, pp. 157-159; Abū Khayr 1986, pp. 237-238]。ムハマディヤとの関係は不明だが、後に彼は『ファトフ』において、東ジャワのマランで開設したイスラーム学校を、この雑誌にちなんでファトフ学院 *Madrasa al-Faṭḥ* と名づけたことを伝えている。"Madrasa al-Faṭḥ fi Jawa," *al-Faṭḥ* 287 (February 12, 1932): p. 5.

- (72) "Mu'tamar al-Shubbān al-Muslimīn fi Indunisiyā," *al-Faṭḥ* 235 (January 22, 1931): p. 10; "Jarīda Islāmiya fi Jawa," *al-Faṭḥ* 236 (January 29, 1931): p. 5. モンズ・イスラミーテン・ボントは、ヨーロッパ教育を受けた学生によって一九二五年に結成されたイスラーム団体である。

- (73) "Al-Islām fi Jawa: Idtihad Hūlandā la-hu," *al-Manār* 26/6 (October 18, 1925): p. 480. 『ウイファーク』は、マッカ出身

のムハンマド・アル・ファッターフ Muhammad al-Fattāḥ によって一九二三年に創刊された週刊誌で、アラビア語版とムラユ語版が存在する [Mobini-Keshen 1996, pp. 240-241, 250]。

- (74) "al-'Alawiyūn wa-l-Irshādiyūn: Ma'raka Damawīya, Qatīl wa-Jarīhā Katirūn," *al-Faṭḥ* 331 (February 10, 1933): p. 5.
(75) "Amīr Jawa bi-Makka," *al-Faṭḥ* 379 (January 11, 1934): p. 19.
(76) "Masra' Qā'id Qūwat Indunisiyā," *al-Faṭḥ* 775 (October 16, 1941): p. 7.

(東洋文庫研究員)

Periodicals of the Arab Region and Southeast Asian Mediators in its Network: In the Case of a Cairene Journal, *al-Faṭḥ*

YAMAGUCHI, Motoki

Among the technologies that developed in the modern West, print promoted communication on a global scale. In the Muslim world, some Arabic-language periodicals of the Arab region acquired wide readership, even in Southeast Asia. Among those periodicals read in Southeast Asia, previous studies have examined *al-Manār* (1898–1940), a famous Islamic reformist journal published in Cairo, almost exclusively. They have overlooked, however, the influx of many other periodicals of the Arab region into Southeast Asia. This article deals with a Cairene Islamic journal, *al-Faṭḥ* (1926–1948), which was published by Muḥibb al-Dīn al-Khaṭīb. It examines its contributors and other information sources on the Southeast Asian side, comparing them with *al-Manār*. This article elucidates Southeast Asians who acted as mediators between the two regions in the network formed by periodicals of the Arab region.

Al-Faṭḥ published about 200 articles relating to Southeast Asia, even more than those of *al-Manār*. As for the contributors and information sources on the Southeast Asian side, we can point out two things; first, just like *al-Manār*, two groups of Southeast Asians became deeply involved with this journal, that is to say, Southeast Asian Arabs and indigenous Muslims who studied or had studied in the Arab region, such as Makkah and Cairo. The numbers of both groups increased due to the widespread availability of steamships, another technological development of the modern era, in Indian Ocean traffic. Second, we find few contributions from leading figures among Southeast Asian indigenous Muslims in *al-Faṭḥ* as well as in *al-Manār*. Thus, it is suggested that, within the Southeast Asian Muslim community, leading indigenous figures dedicated themselves to internal affairs, while Arabs and some indigenous Muslims who stayed or had stayed in the Arab region played specific roles mediating between the two regions.